

5. 辰馬考古資料館および天理参考館所蔵の福田・椎塚貝塚関連資料

はじめに

下郷コレクションは、1903年（明治36）に設立された滋賀県長浜市の財団法人下郷共済会が旧蔵していた資料のうち、現在大阪歴史博物館が所蔵するものについての呼称である。同会は、地域における普及啓発活動を実践するなかで、1921年（大正10）には「鍾秀館」と呼ばれる博物館を建設、当時所蔵していた文化財の展示を行っていたことが知られている。

残念なことに、戦後同会が解散するに至り、所蔵していた多くの文化財は分散して売却されていった。しかし詳細な経緯や購入先についてはほとんどわかっておらず、旧蔵品の実態解明はきわめて困難な状況にある。

今回、共同研究の一環として、この下郷共済会旧蔵の縄文時代コレクションが大阪歴史博物館以外にどの程度所蔵されているかについて調査する機会を得た。既知の情報として、辰馬考古資料館が所蔵するコレクションの一部が多く、多くの展覧会でも利用されるなどして巷間に流布しているほか、天理参考館にもその旧蔵品の一部が収蔵されている。これらについて、まずはその総体を把握し、下郷コレクション同様、それら縄文時代資料が高島多米治採集のものであるか否かの確認を目的として、調査を行った。あわせて、下郷共済会が所蔵していた文化財の目録についても調査を実施した。以下にその成果をまとめておく^{（註1）}。



高島多米治（1866～1960）
（板橋区立郷土資料館所蔵）

1. 辰馬考古資料館に所蔵される福田・椎塚関連資料

まず、辰馬考古資料館が所蔵する下郷共済会旧蔵品^{（註2）}を対象として、墨書注記の有無や出土地情報といった基準によって、高島多米治による採集品の可能性が高いものを選出した。その結果、高島蒐集品と思われるものは土器14点、土偶4点、土製品5点、骨角器30点であった^{（註3）}。そのなかで、福田・椎塚貝塚関連資料については、表1にまとめたとおりである。

同館所蔵品には、安井健一氏も指摘するように、下郷コレクションと同じ数字注記が施されている〔安井2009〕。この数字は、出土地注記と異なり、鍾秀館が『日本石器時代土器選集』（1927年刊）の刊行後にあらたな目録および図録作成を企図し、その整理作業（京都大学の小林行雄に委嘱）に際して付与されたものらしい〔上田1958〕^{（註4）}。したがって、ある番号体系のもとで与えられたことはあきらかであり、「主要なものについては一応の完成をみた」この作業において目録化もされていたようであるが（上田前掲書）、目録自体の所在が今日わからなくなっているため、残念ながら番号体系の詳細は不明である。現状を見る限りでは、例えば同じ出土地でかつ同じ種類の遺物であっても異なった番号が与えられている例や、同じ椎塚出土土器であっても番号がつくものとつかない例が存在しており、番号体系と付与の法則性を復原していくことも今後の課題のひとつであろう。ちなみに、下郷コレクションでは土器にはこの数字注記がほとんどみられず、土製品・石器・骨角器には頻出するという傾向がある。

所蔵品の特徴としては、高島採集品の中でも特異な造形を持つものが目立つ。事実「重要美術品」に指定されたものが13件存在する。そのなかには、福田貝塚出土の人面装飾付注口土器や椎塚貝塚出土のアワビ貝形土器など、いわゆる“珍品”と呼ばれるものが含まれており、収蔵される資料数に対してこうした“珍品”の占める率が高いことが指摘できよう。

また、採集地の傾向からも下郷コレクションとの共通性が挙げられる。例えば、千葉県余山貝塚・宮城県里浜貝塚・岩手県瀬沢貝塚からの採集品など、下郷コレクションでも頻繁に目にする出土地からのものが存在する。これらは、数はそれほど多くないが、かえってそのことが下郷コレクションとの対比からあえて表現するならば「選出」された品々だったのではないかとの印象を与える。先に指摘した“珍品”の存在とあわせてみても首肯されよう^(註5)。

最後に、同館所蔵の下郷共済会旧蔵品と他機関所蔵品との大きな違いとして注目されるのは、蒐集品を収めていた木箱を伴っている点である。例えば、椎塚出土の注口土器（急須形）が収められていた箱には「下郷共済会」の焼印が押されているほか、「重要美術品／土瓶形土器 壺個」という箱書きが確認できる。それ以外にも「下郷共済会」のネームを印字したラベルが貼付ないし附属している。これらは、高島蒐集品を所蔵する他機関では確認できておらず、おそらく同館のみに遺存しているという点でたいへん興味深い。ただ、箱書きの年代（昭和初期）に比べて、箱自体がやや新相を呈する点は注意を要する。売却に際して装丁を整えた可能性も残る。

いずれにしても、辰馬考古資料館所蔵品が下郷共済会旧蔵品であり、かつ高島多米治蒐集品を含むことは間違いない。その購入した時期はまだ特定できていないが、1943年（昭和18）に刊行された『重要美術品等認定物件目録』によれば、この時点までは下郷共済会の所蔵となっていること、さらに1953年には重要文化財に指定されていることから、恐らく戦後から1950年代初頭の間に購入されたものと考えられる。

2. 天理参考館に所蔵される福田・椎塚関連資料

天理参考館が所蔵する下郷共済会旧蔵品のうち、高島蒐集品と思われるものは、土器29点、土製品3点で、そのうち福田貝塚の墨書注記が残る個体は確認できなかった^(註6)。一方、「椎塚」の注記をもつものは、堀之内式～加曽利B式期の深鉢形土器を中心として19点が存在する（表2）。

このほか、余山貝塚の骨角器なども高島採集資料である可能性が極めて高いほか、耳飾り3点が『原始文様集』〔杉山寿栄男1923〕に掲載されているものと一致することが確認できた。

天理参考館所蔵品においても、上述の辰馬考古資料館所蔵品および下郷コレクションと同様、数字

表1 辰馬考古資料館所蔵の福田・椎塚の土器

出土遺跡	遺物名	数量
福田貝塚	人面装飾付注口土器	1
	鳥形土器	1
	台付異形土器	1
	台付皿	1
	釣り手土器	2
	筒形土偶	1
	スタンプ形土製品	2
福田貝塚 (葉師台)	鳥形土器	1
	異形筒形土器	1
	山形土偶	1
椎塚貝塚	アワビ貝形土器	1
	注口土器	1
	注口土器（注口部）	1
	スタンプ形土製品	1
	土製獣	1
	釣針	1
	弭状	1
	鉋	1
	骨角器（ヤスまたは髪針）	1
	骨角器（ヤス）	1
	骨角器（髪針）	1
		23

表2 天理参考館所蔵の椎塚の土器

出土地 (天理参考館での登録情報)	点	器種	注記	白ラベル	その他
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	大型広口鉢	椎塚	判読不能	セメント・石膏両方使用。注記場所は土器外部底面。
		小型深鉢	椎塚	135	セメント復原。底面には他にも何か墨書らしきものがみられるが、判読不能。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	深鉢	椎塚	15 ■	セメント復原
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	広口鉢	椎塚	157	セメント復原か。接合した破片のうち2点に墨書あり。
	1	小型深鉢	椎塚	156	外面無文、内面沈線一条。石膏復原。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	小型深鉢	椎塚	判読不能	セメント復原。墨書は外部底面。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	平底広口鉢	椎塚	80	ラベル剥がれ痕跡。カルシウム付着。口縁突起三単位。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	小型深鉢	椎塚	判読不能	セメント復原か。内面に新聞紙付着。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	小型深鉢	椎塚	139	カルシウム付着。ほぼ完形。波状口縁（三単位突起）。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	小型平底鉢	椎塚	70	波状口縁。石膏（橙・赤色の着色）。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	平底広口鉢	椎塚	68	石膏復原。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	注口	椎塚	3	体部とは別個体の注口部を使って復原。セメント復原か。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	平底広口鉢	椎塚・43-1	61	カルシウム付着。セメント復原。注記の「43-1」が明治43年1月だとすると、高島の足跡とは異なる可能性有り。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	平底浅鉢	椎塚	5 ■	石膏復原
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	碗	椎塚	判読不能	完形。無文。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	碗	椎塚	判読不能	セメント復原。
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	ミニチュア	椎塚・108	なし	
茨城県稲敷郡江戸崎町 椎塚貝塚	1	碗	椎塚	40	無文
茨城県稲敷郡高田村椎塚	1	ミニチュア	椎塚	99	粗雑。セメント復原か。

の注記が施されている個体が存在した。さらに、番号を記したタテ 1.5cm × ヨコ 3cm 程の白い紙ラベルが貼付される例もある（前述の数字注記との関係は不明）。こうしたラベルを貼付するケースは下郷コレクション中にも確認できるが、天理参考館のラベルとは仕様がやや異なる。

一方、土器の復原方法についてみると、橙色の粒子を含む赤褐色の修復材（あるいは彩色）を用いた個体もあり、この点でも下郷コレクションと同様である。同一の所蔵機関において修復が施されたとみてよいだろう。ラベルの違いがどのような意味を持つのかは今後の課題である。

天理参考館に以上の資料が収蔵された時期は 1952 年のことであり、大阪市立美術館に下郷共済会旧蔵資料が入った時期（1958 年）よりもやや早かったことがわかる。

3. コレクション散逸の時期について

下郷共済会旧蔵品の調査を進めていくにあたり、基本情報のひとつである収蔵時期が問題となる。これについては、辰馬考古資料館以外において所蔵機関に残る諸記録から、1950 年（昭和25～35年）代という時期がわかった。

ただし、この年代はあくまでも現在の所蔵機関に収められた時期であり、これがすぐに下郷共済会旧蔵資料の散逸時期に一致するわけではない。そこで、現在東京大学史料編纂所に保管されている『下郷共済会所蔵品目録』^{（註7）}の内容を紹介し、その時期について確認しておきたい。

同史料は、縦 21.1cm、横 29.9cm の複写物再装丁本で、縦書き罫線に手書きで書き込まれたリストである。前書・目次・奥付などはなく、最末頁裏に鉛筆書きで「47 年採訪時複製」とあり、用紙の状態から、鉛筆書きの年代は「昭和 47 年」と推測できる。原書の所在は不明だが、内容からは下郷共済会自体によって作成された可能性が高いと判断される。いつの時点での目録なのかは不明だが、上欄外に売却の事跡が追記されており、その後の売り立てや財産管理に用いられたことが看取される。

内容は概ね、所蔵品の分類毎にリスト化されており、それぞれに“品名”、“数量”、“購入寄贈別”、

表3 『下郷共済会所蔵品目録』に載る高島多米治関係箇所

品名	数量	購入寄贈別	※備考
石器時代／土器、土偶、骨、牙、類	壺万三千点	大正十一年七月一日／貳万五千円高島多米治購入	欄上外記事として、「売却／昭和二二．五．五／土器破片二五〇個／某氏／昭和二二．三．一七／土器完全五百点／外二破片 某氏」とあり。
石器	四十七個	大正十四年四月二十日／高島多米治殿寄贈	
陶器	一個	昭和三年八月廿一日／高島多米治殿寄贈	
茨城県稲敷郡大須賀村発見／土版	一個	昭和十三年三月／百円 高島多米治購入	

“適要”という項目が立てられている。問題となるのは『発掘品并古鈴』の箇所である。このなかで“購入寄贈別”項目に高島多米治の名前が確認でき、購入で二件、寄贈で二件が掲載されている。該当箇所を抜き出すと、表3のようになる^(註8)。

注目すべきは「石器時代／土器、土偶、骨、牙、類」とされた「壺万三千点」の資料であろう。その上欄外の書込には、「売却／昭和二二．五．五／土器破片二五〇個」、「昭和二二．三．一七／土器完全五百点／外二破片」とあり、1947年（昭和22）に二度にわたって売却されたことがわかる。また、この「某氏」がどのような人物かは現在詳しいことは解らないが、おそらく古物商であり、大阪市立美術館の購入先と同一であった可能性が高い。大阪市立美術館の購入点数は約6000点とされており、その点数が「壺万三千点」と一致しないが、大量の一括資料が挙がるケースはこれのみであるため、おそらくその約半数が大阪市立美術館に購入されたのであろう。ここで、欄外の売却履歴に立ち返ったとき、13,000点の膨大なコレクションが散逸していった経緯が見て取れよう。さしあたって記録の上では合計750点ほどの資料が売却されたわけだが、これだけの数が一括して購入・保管されたならば、今日、かならずその情報は伝来しているはずである。それが無いということは、この土器はその後さらに分売されていったと考える方が自然だろう。そしてこうした分売が何度か行われた結果、残った6,000点が全て「アメリカに売られていく」〔望月1984〕ところを、大阪市立美術館が購入したということなのだろう。

いずれにしても、1947年（昭和22）という戦後間もない時期に下郷共済会が所蔵していた縄文時代資料の一部が売却されていたことが明らかになった。先に見た辰馬考古資料館の下郷共済会旧蔵資料購入時期とも大きな齟齬はなく、おそらく上述した流れの中で、購入されたものであると思われる。

加えて、このリストはこれまで判然としなかった高島多米治蒐集品が下郷共済会にわたった時期・購入金額・方法（寄贈か購入か）も明らかにしている。筆者は高島から下郷共済会へ資料が移った時期を1921年（大正10）頃と考えていたが、リストから「大正十一年七月一日」であることが判明した。と同時にあらたな問題が浮かんでくる。それは、『考古学雑誌』12巻9号（1922年）に載る『日出新聞』（四月十二日付）からの抜粋記事にみえる「石器時代遺物展」開催時期よりも新しいという点である。同記事は、鍾秀館があらたに入手した収蔵品のお披露目としてこの展覧会を開催したことを伝えているが、正確には、まだこの展覧会の時点では完全に購入が済んでいなかったことを知り得るのである。これだけ多額（「貳万五千円」）の決済が完了していないうちに蒐集品を東京から長浜に移送することを許可した高島にどんな事情があったのか、それを少なからず物語っているように思われてならない。

4. その他の機関に所蔵される下郷共済会旧蔵資料

このほかに福田・椎塚貝塚の採集資料を多数所蔵する機関として東京大学や東京国立博物館などが挙げられるが、高島蒐集品と確定したものは寡聞にして知り得ていない。

ところが、『下郷共済会所蔵品目録』（表3）に見える「茨城県稲敷郡大須賀村発見」の土版が、現在東京国立博物館が所蔵する土版（列品番号38401）〔井上・松浦1996；pp.68〕である可能性がでてきた。同目録によれば、土版一点が「百円」という高額で取引されていることからかなりの優品であったことが推測されるとともに、その出土地が「大須賀村」（福田貝塚）であることから、東京国立博物館所蔵土版ではないかと推測されるのである。この土版は古くから斯界に知られたもので、水谷幻花（1865～1943）の旧蔵品であった〔不明1910〕。水谷と高島には、活動歴の上で多くの接点があるだけでなく、旧高島所蔵品と見られる土偶（龍角寺出土；現在辰馬考古資料館所蔵品）にも「幻花」の文字があるなど、両者の間でコレクションが移動した痕跡も明らかになっている〔安井2009、加藤2011〕。したがって、この土版も水谷から高島の手に移ったものである可能性が高い。

また、同様の資料交錯の痕跡として、下郷コレクションの土偶（両腕～胸部）と、東京大学総合研究博物館所蔵の土偶（頭部）が接合することが、瓦吹堅氏や上野修一氏によって明らかにされている〔本書瓦吹論考、上野・森嶋2011；pp.41〕。後者は1897年（明治30）に佐藤伝蔵が行った福田貝塚の調査で出土したもので〔佐藤1898〕、おそらくそのまま東京帝国大学人類学教室に収蔵されたのであろう。この頃高島はアメリカに居り、まだ帰国していない。したがって、下郷コレクションの土偶が、果たして高島が後に福田で採集活動を行った際に得たものなのか、後日別の経路から入手したものなのか、今後下郷コレクションの形成過程を明らかにする上できわめて象徴的な資料であるといえるだろう。

そのほか、近年公益法人として活動を再開された下郷共済会でも、現在11点の縄文時代資料を所蔵していることがわかっている〔蓼沼2009〕。これらの資料調査が報告されていないため、詳細を掴むためにも今後早急に調査を行う必要がある。

【註】

- (1) 本報告の成果については〔加藤2011〕においても触れている。
- (2) 同館学芸員青木政幸氏によってリストアップして頂いた。また所蔵資料の実見についても同氏のお世話になった。なお、当日他機関への出品ため実見できなかった資料もあることを附記しておく。
- (3) 〔加藤2012〕では土器の点数を13としていたが、14点に訂正する。
- (4) 同様のご教示を坪井清足氏からも頂戴した。
- (5) 坪井清足氏のご教示によれば、下郷共済会旧蔵品が辰馬考古資料館に収蔵された経緯には京都大学の梅原末治と辰馬悦蔵との交遊が背景にあったという。
- (6) 資料の実見ならびに所蔵資料情報提供について同館学芸員藤原郁代氏にお世話になった。
- (7) 東京大学史料編纂所所蔵。請求記号：RS6400-9、書名：下郷共済会所蔵品目録。
- (8) リストの中にある購入先個人名は「某」とした。

【参考文献】

- 井上 洋一・松浦 宥一郎 1996『東京国立博物館図版目録 縄文遺物篇（土偶・土製品）』、東京国立博物館
上田 舒 1958「大阪市立美術館新収縄文資料について」『仏教芸術』37号、仏教芸術学会・毎日新聞社
上野 修一・森嶋 秀一 2011『土偶の世界—縄文人のこころ—』第101回企画展展示図録、栃木県立博物館
加藤 俊吾 2012「近代における縄文時代コレクションの形成とその活用—高島多米治採集資料を題材として—」

『土偶と縄文社会』先史文化研究の新視点Ⅲ，明治大学日本先史文化研究所，雄山閣

佐藤 伝蔵 1898「常陸国福田村貝塚第二回発掘報告」『東京人類学会雑誌』第 14 卷 第 146 号，東京人類学会

安井 健一 2009「辰馬考古資料館所蔵龍角寺出土土偶について」『千葉縄文研究』3，千葉縄文研究会

蓼沼 香未由 2009「下郷共済会所蔵の東関東後期縄文土器」『利根川』31

望月 信成 1984『ひと筋の細い道』，清文堂出版

不明 1910「石器時代土偶及土版（口絵説明）」『東京人類学会雑誌』第 25 卷 第 289 号，東京人類学会

杉山寿栄男 1923『原始文様集』，工芸美術研究会（北海道出版企画センターにより 1978 年に再刊）